みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

養生と共生の軌跡：機関研究：「包摂と自律の人間学」領域　ケアと育みの人類学（2011-2013）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5550

PROJECT

養生と共生の軌跡

文
鈴木七美

機関研究 ●「包摂と自律の人間学」領域
ケアと育みの人類学（2011-2013）

近年、ウェルビーイングに配慮した生活の場のありかたが、国家単位の福祉のみならず、人々の権利を視野に収めたグローバルな視点に基づく市民社会の目的という観点から注目され、ウェルビーイングの指標も提示されている。だが、ウェルビーイングは多様であり、また終わりの見えない紛争や著しい格差拡大など、「よい状態」や「幸福」・「希望」を思い浮かべることすら難しいという状況を考えると、画一的な「ウェルビーイング」を目指すだけでは、人々が希望を失わず安心して生きる場を共有する道を拓くことには繋がらない。

そこで私たちは、個々人の状況や望むことがらを掬いとる人類学研究として、「ケア」という言葉で表現される領域に注目している。「ケア」は、人々が、他者とは限らず、自分や環境について、思いを馳せる、配慮するという意味で使われてきた。英語 care の歴史上の広範な用法は OED: *Oxford English Dictionary* に記録されているが、1980 年代以降登場するようになった日本語の「ケア」には、自分自身への関心が頻繁に表現されている。

他方「ケア」は、育児に関わる世話という意味に加えて、社会の高齢化のもとで、学問的議論に向けた共通理解や、「介護」に関わる人々の「関係性」について検討がなされてきた（藤田 2005；鈴木 2005；工藤 2008；上野 2011）。こうした観点のなかからも、私たちは日常生活における個々人の欲求や希望から「ケア」を掬いとろうとしている。

これら「ケア」は、「よい・正しい」という価値観に基づくものではなく、気にする、大切に思うなど、個々の価値に固執する人々の姿を照らし出す。したがって、多様なケアの検討は、人々が守りたいものや価値観、そして、それらが齟齬や争いを引き起こす過程や共存する姿に迫るものである。本研究の目的は、個々人の生をめぐる関心やこだわりとしての多様な「ケア」を出発点として、これらが表現され議論される機会を得ることによって、生きる場を共有することに繋がる幾つもの道を、生命を継承してきた各地域の葛藤と共生の軌跡から探ることである。

写真 1　アブシバレー　（生まれた赤ん坊を人びとに紹介し，みんなで迎える沖縄県国頭村楚洲の儀礼）。現地の「共同店」に長年掲げられてきたカレンダーの写真（2009 年 11 月 5 日　平野亮撮影）。

公開シンポジウム「ケアと育みの人類学の射程」（2012 年 1 月 28 日）では、教育の歴史人類学の最新の成果として、"education" は、人間の一生に関わり生を養う（養生）という明確な意味をもつことが報告され（白水浩信「教育・福祉・統治性──能力言説を越えて」）、教育としての養生に関し議論した。2012 年度は、教育、エイジング、宗教運動など、とりわけ価値観やアイデンティティに関わる課題が顕わとなる、「養生」に基づく数々のケアが交錯する場に焦点をあて、共生に向けた活動の軌跡を照射した。

エイジングから考える「養生」時間

2012 年度は、第 1 に、「年を重ねること」・「養生」という意味をもつ “aging” について議論を深め、論文集 *The Anthropology of Aging and Well-being*（SES 80, 2013）においてその成果を提示した。この論文集の特徴は、心身の変化や移動によって新たな文化に遭遇する高齢期へのケア（関心・配慮）が、さまざまな世代の人々や環境へのケアへと展開する様相を、国内外のフィールドワークと第一次資料に基づいて描き出すことにある。暮らしの環境を考え整える共同作業としての高齢期ケアが、新たな地域文化を生み出す過程を照射し、生活の場に関する知の醸成と伝達というライフサイクル間関係行為を、地域社会において独自の共生の場を創出する要素として位置づけた。

「パート 1　The Meaning of Time and Space for Cultivating Life」では、生活を支える活動から解放され、スコレー（閑暇）を生きることとイメージされる高齢期に関して考察し、スコレーの意味の歴史的変遷を検討すると共に、「生を養う」ことの意味を問い直した。具体例として、高齢者に適合的な産業の創出が、働く高齢者と支援する他の世代とのコミュニケーションを深め、働くことで生まれた「余暇」が、町のデザインに参加する人々が往来する時間として共有されてゆく過程を辿った。また、廃校となった沖縄県の小中学校を利用した社会福祉複合施設が、世代や地域を越えて人々が行き交う場として利用される経緯を辿り、かつての「共同店」や共同体の行事に関するヴァナキュラーな地域の知恵が活用されていたことを明示した（写真 1）。

「パート 2　The Regeneration of Living Places by Sharing Cultures」では、移動に伴う生活環境の変化を経験する者としての高齢期・高齢者に焦点をあて、「異なる」・「新たな」文化を共有する過程を検討した（写真 2）。「パート 3　A Reflection on ‘Time’ During Life Stage Transitions」では、ライフステージにおける変化、とりわけ「死する者」としての意識を経験する者として、人はどのような時間を紡いできたのかに焦点をあて、人間関係を含めその環境を検討した。

写真２　日系ユニットをもつ中国系高齢者対象施設で、生け花を教える日系高齢者（Tilda Hui 提供）。

以上から、高齢者や高齢期のウェルビーイングに関わるケアが、すべての世代の人の生活と密接に関わるものであること、そして、人生時間の使い方を柔軟に選択できることによって、差異を活かし、多様な希望に応える生活環境を構想する可能性について提示した。

教育の現場から考える「養生」空間

2012 年度は、第 2 に、多様な人々が文化を創造しつつ共存する方途を構想できるのかという教育の人類学のテーマについて検討し、論文集の原稿をまとめた。この論文集の目的は、急速に多文化化が進行しつつある社会で、人々のウェルビーイングと、社会における価値観を基盤とした次世代育成を目指す実践との関係および課題について、検討することである。各論文は、一方で自律、平等、包摂など現代市民社会において重視される価値観に基づく教育が、多文化社会の教育現場において排除の要素を生み出している現状を指摘し、他方で、エスニシティに関わる文化的価値観を次世代に継承することを明確な目的として掲げている教育の場にあっても、議論に開かれた空間を生み出す可能性について、具体的な情報を提示している（写真 3）。

「ヒーリング・オルタナティヴス」における養生と選択

2012 年度は、第 3 に、国際シンポジウム「ヒーリング・オルタナティヴス──ケアと養生の文化」を開催し、地域の歴史のなかで、ヒーリング・オルタナティヴスの位置づけと果たしてきた役割を検討することをとおして、近代的な「治療」に包括されないケアと養生の考え方、および実践の多様性とその変動に関し考察を加えた。現代の科学知識によって薬剤の有効性が十分に確認され得なくても、治療が有効であるという経験が蓄積されているケースにおいて、この治療法を選択する人々の「自由」を尊重する場合の具体的な方法に関しても知見を深めた。たとえば、ホメオパシー（同種療法）が脈々と続けられてきたドイツでは、患者と医師が語り合う時間そのものが治療の一部として重視されている。

写真３　ノルウェーの新聞 ‘Adresseavisa’ に掲載された「子ども期、自然、国家のアイデンティティ」という記事の写真（Anne-Trine Kiørholt 提供）。

「宗教的社会運動」から考える共生と希望

2012 年度は、第 4 に、国際シンポジウム「グローバル化における紛争と宗教的社会運動──オセアニアにおける共生の技法」（2013 年 1 月 26 日　企画者：丹羽典生（国立民族学博物館））を開催した。このシンポジウムでは、近年のグローバル化のなかで生起している紛争や宗教運動を、〈人々の生きる場を確保する運動〉と捉え、多元化の波にさらされている人々が共生の空間をいかに形成しているのか、その特質と過程を、「希望」などをキーワードとして検討した。

機関研究「ケアと育みの人類学」は、グローバル化・多様化する社会において共有可能な共生の諸技法を掘り起こし、具体的に提示する試みである。生を養うことに関わる議論がすべての人に開かれることが、共存の場を不断に構想する可能性について、「差異をもった個同士が…アクセスポイントを探し求めて対話的で交渉的な関係を常に現在形としてうち立てていく」「〈新しいコミュニティ〉」（川田 2009）や、「コミュニティを、…コミュニタスの一表現、すなわち、社会的帰属を対話的（コミュニカティヴ）で公共的な出来事として想像し、経験する特定の様式」（デランティ 2006）などの言及と関心を共有しつつ検討することである。それは、他者との関係において同化的な「支配の欲求」をこえて、「他者の自由とその主体性こそが欲求される」「出会いの欲求」において、「自己をもたえず他者へと異化することを欲する」（真木 1977）ことをとおして、豊かな生のヴァリエーションを考えることになる。同時に、養生と生涯教育に関わる問題群（たとえば、Fejes and Dahlstedt 2012; Z. バウマン 2008 などでも問題意識を共有）に関しても、2013 年度の課題として考察する。

【参考文献】

バウマン，Z. 2008『リキッド・ライフ──現代における生の諸相』長谷川啓介訳 大月書店

デランティ，ジェラード 2006『コミュニティ』山之内靖・伊藤茂訳　NTT 出版。

Fejes, A. and M. Dahlstedt 2012 *The Confessing Society: Foucault, Confession and Practices of Lifelong Learning*. London: Routledge.

藤田真理子 2005「序文」『文化人類学』70(3)：327-334。

川田牧人 2009「結社 association　community」日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善

工藤由美 2008「ケア論の再考」『人文社会科学研究』17：183-197。

真木悠介 1977『気流の鳴る音──交響するコミューン』筑摩書房。

鈴木七美 2005「柿の葉を摘む暮らし：ノーマライゼーションを超えて」『文化人類学』70（3）：355-378。

上野千鶴子 2011『ケアの社会学──当事者主権の福祉社会へ』太田出版。

すずき ななみ

先端人類科学研究部教授。専門は文化人類学・医療社会史。著書：『出産の歴史人類学』（新曜社 1997 年）、『癒しの歴史人類学』（世界思想社 2002 年）；編著書：*The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together*,（Senri Ethnological Studies 80, National Museum of Ethnology, 2013）。